

Title	第5回：ミントウンの会（南城市玉城）と地元学校の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 98-114
Issue Date	2012-02-23
URL	<a href="http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25799">http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25799</a>
Rights	

## 第5回：ミントウンの会（南城市玉城）と地元学校の連携について

と き：平成23年11月5日（土）10：00～12：00

場 所：琉球大学 文系総合研究棟 603

対象者：石嶺 眞吉氏（ミントウンの会会長）、糸数栄輝氏（ミントウンの会副会長）、仲村正賢氏（ミントウンの会副会長）、嶺井なおみ氏（ミントウンの会事務局長）、高嶺常子氏（ミントウンの会事務局）、港川厚子氏（ミントウンの会事務局）

調査員：9名（島袋純、大宜見洋文、新垣光栄、大城武秀、嘉数学、佐藤学、前城充、糸数温子、中村任子）

オブザーバー：福里知（南風原町立翔南小学校 PTA 会長）



▲ミントウンの会のメンバーのみなさん。

前列右から石嶺氏、糸数氏、仲村氏、後列右から嶺井氏、高嶺氏、港川氏



▲聴き取りの様子

（敬省略）

石 嶺：私たちは、学校支援ボランティア「ミントウンの会」という会を組織しています。発足して6年目になります。宜しくお願いします。

なぜ「ミントウン」という名前かというと、仲村渠というところにミントウン城<sup>ミントウン</sup>という御獄があります。そこは琉球民族の発祥の地と言われており、そこにあやかっつけました。

設立当初の経緯ですが、私も職場が学校でしたので、学校にいる頃から地域と学校との連携というのをよく口にしたり、あるいは行政のほうに地域との連携をお願いしたりしていました。退職後は教育委員会の教育委員になりましたので、教育委員の立場から、学校の先生方の多忙さと言いますか、一人の先生がたくさんの子どもたちを抱えていて、そういうような状況を目の前にして手厚い学校支援をすることが難しいようでしたので、ボランティアを立ち上げることを教育委員会の中で話し合いました。最初、準備委員会を立ち上げました。その時の世話係を当時の教育長にやってもらいました。

最初の立ち上げは、やはり「教職経験者」を中心に呼びかけて発足したのですが、今は、教職経験者は139名のうち4分の1程度です。教職経験者だけではなくて公務員の方、子育てが終わった方、あとはPTA会員経験者等多くの方々に入会してもらっています。

会則も発足してすぐ作りました。役員としては、会長が1人、副会長が2人、事務局2名、

監事2名です。今日来てもらっているのは副会長お二人と、事務局の方たちです。

会員は、去年は139名でした。男性が39名、女性が100名。ミントウンの会の組織というのは、地域の子どもに地域の大人が関わって、後押しして開花させていく、こういう気持ちのある有志を募って組織しております。

会員への勧誘は、誰か担当がやるということではなく、みんなで気軽に、できそうな方に声かけをして仲間を募っています。その中でも、勧誘を中心にやってくれているのは事務局です。事務局の方々が色々やってもらわないと、ミントウンの会は成り立たないという状況です。

玉城には、玉城、百名、船越の3つの小学校と玉城中学校がありますが、学校側からの要請は全て事務局を通します。事務局が会員の139名の方々に電話で「いついつ、何時から何時まで、こういう形でボランティアできませんか？」と調整して、学校側に派遣表を送付します。時には、3小学校からの要請日が重なり、相当な人数が必要になることもあります。それでも可能な限り対応します。私たちはあくまでもボランティアで対応しますので、自分の時間が許す範囲で、何時から何時までという目安を立ててお願いしますので、時には派遣人数が足りないこともあります。

なるべく、学校がボランティアを受け入れてよかったな、と思えるように、こちらから押し付けがましいようなことはしません。学校側からの要請に対して積極的に対応していく、ということです。私たちの基本姿勢というのは、あくまでも学校からの要請に従って活動する、学校に押し付けない、学校に負担をかけないように支援していこう、ということです。

支援内容としては、主に学習支援があります。少人数制で、授業についていけないような子どもたちをマンツーマンもしくは2、3人の子どもたちを目安にして、顔を突き合わせながら指導していくような学習支援です。

支援内容としては、読み聞かせ。朝の読み聞かせタイムが各小学校で週1程度あります。

それから総合学習、地域学習の対応もしています。実際に、中学校の総合学習などで地域のことについて取り組んでいる場合、要請があれば応えています。一緒に地域を歩き回ることもあります。平和学習支援もやります。毎年のように慰霊の日に向けてやっています。

それからクラブ活動、部活動の要請にも応えています。

時には、学校の整備等もします。学習庭園などの支援依頼があったらトラクターを持ち込むこともあります。だいたいそういうような支援活動です。

平成22年度の学習支援派遣状況の延べ人数ですが、3小学校への学習支援派遣が554人、中学校への学習支援が46人、小中学校の読み聞かせに549人。合計すると1000人以上の派遣がありました。

また、ミントウンの会は、会としての事業計画もあります。学校での効果的な学習支援のあり方については、評議員会で話し合います。評議員会には校長先生も入っておりますので、その中でどういう支援のあり方がより効果的なのか、よりふさわしいのか、学校から課題を出してもらったり、また、私たちからも課題を出し合って、新学期と二学期始めの9月に、意見交換・情報交換をしながら、より効果的な支援を目指して、話し合いを続けています。評議員会は、この連携についての情報交換です。

また、ミントウンの会のねらいには、子どもたちの学習支援と、会員相互の親睦と研修とい

う2つのねらいがありますので、会員のための研修会等も持っています。総会の時にはゲートボール、またはグランドゴルフ等を取り入れ親睦をはかりながら、情報交換をしております。

私たちの地域は玉城ですけれども、玉城以外に住んでいる出身者の参加もあります。また、玉城出身の会員から勧誘されて入っている他地区の方もいます。そういうような状況です。

活動を通して私たちがいつも心がけていることは、子どもの目線に立って進めていこう、ということです。学習支援をしていますと、さっさとできる子と、考え考えゆっくり理解していく子というわけですが、やっぱりじっくりやるのを待って、やる気を後押ししていくような姿勢でやっています。子どもたちが、「あ、わかった！やった！」という時に、私たちはやりがいというか、生き甲斐のような感情になります。やっぱり子どもたちから生き甲斐をもらっていると思います。

私たちと学校の連携ですが、窓口を一本化しようということで、学校の要請は、係りの先生と直接やるのではなくて、係りの先生が「要請書」を教頭先生に目を通してもらい、教頭先生から要請してもらうという形を取っています。要請は、「学校支援ボランティア要請書」というのがありますので、それを提出してもらっています。なるべく早めに、少なくとも3週間前の要請だと助かります。というのは、電話連絡で会員と調整しますので、すぐ明日、明後日というのは対応できないです。そういうようなやり方をお願いしています。

特に学習支援ですが、ドリル的な学習支援であればすぐにできますが、課題発見的な応用・発展的問題学習みたいなものであれば、事前に教材や資料等を配ってほしいというようなお願いをしています。

それから行政との関係については、今、会組織の事務経費等が必要で、今のところ、南城市から予算的な支援を受けています。

以上が、だいたい私たちの取り組みだと思います。

大宜見：今、南城市の教育委員会から予算が下りているという話でしたが、対米請求権協会で教育委員会から下りているというふうにも聞いたのですが？

石 嶺：私たちは純粋なボランティアから始まっているんですが、やっぱり予算が必要だということになって、その時はある企業から5万円の融資を受けたんですね。それからハワイの移民史を送ったら、ハワイから10万円のお礼がきて、それを立ててもらったりしていたんですが、それが尽きてなくなったら那覇市在住の郷友会から10万円。その後、対米請求権協会が学校支援に予算を出していることを新聞で見たものですから、そこに出向いて要求しました。それで私たちはミントウンの会に直接下りてくるものだと思っていたんですが、そうではなくて、市に予算が下りることになっていて、それで市に請求する形になっています。今、そういう形で賄っています。

大宜見：昨年度までは中学校に理解ある先生がいたから入りやすかったが、今は入りづらい、という話があったんですけれども、そのへんの課題はありますか？

嶺 井：総合的な学習の時間がなくなって、そういう時間が取れない状況です。最近だと暴れる子がいるということで、ミントウンの会も参加してくれないか、という要請を受けて、「関わり公開日」というのに参加しました。ミントウンの会や民生委員、その他の団体に配布する資料をもとに見回りをしています。1日のうち自分の空いた時間にいつでもいいから、ということで私たち

も参加しました。

高 嶺：授業参観みたいな形を取っているみたいです。公開授業という形で、いつでも来てくださいます。

嶺 井：2週間くらい期間をとっています。

島 袋：組織の形態などコンパクトにまとめてくださってありがとうございます。

組織の基本的な枠組みについて聞きたいんですけども、会員の方は基本的には元々は玉城村内の方が多かったが、最近は地区外からの方も多くなっているんですね。南城市からも来られているんですか？

石 嶺：玉城村の出身の方が中心なんです、村外に住んでいる玉城村出身の方からの誘いで入っている方もいます。

島 袋：会員の方は、開かれた形ということなんですね。

佐敷、大里、知念など、市内の他の地域からうちのほうにも来てくれということはあるんですか？または、これから開く可能性はないんですか？

石 嶺：これはありますよね。しかし、今、南城市は、学校支援本部事業を受けています。私たち玉城地域は学校支援本部事業より先に走り出していたので、南城市はそれを受け入れています。知念もそういう組織があるんですが、大里と佐敷の組織が薄いので、市の教育委員会としては、重点的に、大里と佐敷を立ち上げさせようというところに力を置いてやっていると思います。

島 袋：玉城はミントウンの会に任せているということですか？

石 嶺：そうです。ゆくゆくは上の方に学校支援本部事業の統括みたいなのがあって、玉城、佐敷、大里、知念という支部組織があって、これを全部レベルアップしていこうという考え方があると思います。

佐 藤：今、市が重点的にやっている大里と佐敷について、ミントウンの会の経験が学べる機会が市のほうで設定されていたりはするんですか？

石 嶺：これに関しては、学校支援本部事業の運営委員会という組織があるんですが、この運営委員会という組織の中に私と副会長の仲村さんも、そして佐敷、大里、知念のコーディネーターの方も入っております。これからの話し合いの中でそういうふうに関わっていくのではないかと思います。

島 袋：どなたか組織とか会員の問題で質問はないですか？

前 城：この組織が出来上がったのは2005年ですね。現在は約140名の方々が会員だということで、この組織の中で、このミントウンの会のねらいを、少人数だったら情報共有できるけど段々増えてきたときに、どのように説明するのか。例えば、重要なところで「押し付けない」ということと「学校に負担をかけない」という2つのキーポイントがありますが、これを共有するために何かやっていますか？

石 嶺：これは総会のときに共有します。それから、学習支援に入る前に、待合室や校長室、地域連携室で待機していて、時間になったら子どもたちが呼びに来るんですが、その空き時間に、私たちの姿勢について説明するとか、確認をしたりしています。特別にそのために時間をとってやるということはしていません。

島 袋：人の話を聞かない人はいるんじゃないかと思っていて、そういう人が実際に「押し付けず」に、

学校の先生のアシスタントとしてやっていけるのかな、と聞いていて思いました。

高 嶺：実際に学校の先生に向けて「こんなふうに指導したほうがいいですよ」とおっしゃる方もいらっしゃるんですが、私たちの会の中でも時々確認しています。「自分の考えを学校に押し付けないようにしましょうね」とか、「負担にならないようにしましょうね」とか。

石 嶺：やっぱり私たちは支援団体だから、あまり押し付けるというふうになったら困ります。

大宜見：この意識ができたのは、過去にそういう失敗の経験があったんですか？

石 嶺：失敗というよりは、誰かが「こういうのはおかしいよ」とか「こんなふうに指導したほうがいいですよ」と出てきた時に、そのような意見はその場で学校にぶつけるのではなく、校長先生と私たちの話し合いをする場、評議会等で、学校と我々との意見調整をしていくようにしています。

高 嶺：そういう積極的な方は、必ず総会に参加してくれるんですよ。そうすれば役員側が言いたいことが伝わりますからね。

前 城：学習支援の要請が来たときに、最初に対応するのは事務局の方とおっしゃっていましたが、それは高嶺さんや嶺井さんが調整するんですか？元々、お二方は地域で女性会とか地域活動をやってこられて人脈を知っていて、それでやりやすくなっているんでしょうか？どんな感じなんですか？コーディネーター的ですよ。

嶺 井：私は5年の2回、玉城中学校で教職をしておりました。そういう関係がありますが、信頼関係ですかね。これが一番大きいと思います。

前 城：5年の2回ですか。それじゃあ地域の方も知っているわけですね。

高 嶺：私は保育所にいましたので、玉城地域の保育所を全部異動しましたので、玉城地域の保護者の方たちをほとんど知っていますし、この人たちの子どもたちが小学校中学校に入学すると、だいたい顔を覚えていきますので、そういう人脈は確かにあると思います。

石 嶺：港川さんは、民生委員です。

前 城：あと1点ですね。この組織ですごいのは評議会なんですよ。校長先生も入っている。それで、その小学校もお茶飲み会というのがあって、校長先生たちと直に話ができる。学校の課題が分かるから、人脈があると、みんなで課題解決できる。この会も評議員が多分すごいんだろうなと思いますね。ここでだいたい課題も見えてきますよね。これは、組織の当初からあったんですか？

石 嶺：そうですね。組織の当初からあったと思いますね。ミントウンの会を作った当初は、教職員が中心で、ミントウンの会の会員も30名くらいだったと思います。そういうような中では評議員会はそれほど機能していなかったと思いますが、改正を続ける中で、その会の中に必ず校長も、というふうになりました。

前 城：会自体も成長していったんですね。

糸 数：僕は11年間、南星中学校で教鞭をとっていました。今なぜその話をするかというと、その頃から管理職の会が玉城にあったんですよ。それと、教育委員会がタイアップして「人材バンク」を作ろうということで、作ったんですよ。しかし、作りはしたものの活動は頓挫してしまったんですよ。この反省を元に、このミントウンの会ができたんじゃないかな、と僕は思っています。だから何もなかったわけじゃない。最初は、学校のために何かできる組織を作ろうとし

ていたんです。人材バンクですから、学校の教育的な補助でもいいし、環境整備でもいい。そういうような組織自体があって、教育委員会に登録はしたけど、その後が動かなかったんじゃないかなと僕は思います。

石 嶺：そうですね。登録はあるのに機能していない。機能していない要因はどこにあるかという、学校からの要請が来ない。学校からの要請をどういうふうにさせるかというのが、またあまり学校自体他の団体を引き受けることに抵抗があったんですよね。この抵抗があるままでは成功しない、というのがありました。それが、「押し付けない」ということにもつながっていると思います。

新 垣：私たち中城でも学習支援「トトロの会」というのがあります。読み聞かせもあります。あと、文化学習で「グスクの会」もあります。また、スポーツ支援では「吉の裏スポーツクラブ」など色々ありますが、みんなばらばらなんですよ。色んな行事がそれぞれに行われていて連携がしづらいです。やっていく上で調整が難しくて、1つにまとめたほうがいいじゃないかなと思っていますが、どうでしょうか？個々にあったほうが、きめ細かな支援ができると思いますか？

石 嶺：今の話と私たちの組織と違うかなと思うのは、私たちの組織の中には、読み聞かせクラブとか部活動クラブとかそういうものはないんですよ。このクラブで何か行事を持って学校をこの中に引き込むというのはやっていない。私たちは学校からの要請を受けて、学校の教育活動がより効率的にいくようにサポートしていく。本当は我々も組織的な行事を持って、その中に学校をどう取り込むかというのは、今後の課題ですね。まだ、そこまでは行っていないということです。

仲 村：今のミントウンの会のやり方は、できる支援をやっていくということです。例えば、実際に学習支援はできないという方も、読み聞かせの部分で朝の15分くらいだったら時間取れる。1時間くらいの学習支援は、時間を見て、できるときは関わりましょう、というところで積極的にやってもらっています。

それから、地域の文化ということで言えば、地域活動に生徒が参加する場合、その地域の方が行事について子どもたちに事前学習をするということもあります。私が住んでいるところでは、ハーリーがあります。その中でハーリー行事というのは、地域ではこういう目的でやっているんだ、想いというのはこういうものなんだよ、とか。その行事に向けて小学生はどういうふうに取り組んでいる、中学生や高校生や一般のみなさんの関わりはこういうものだ、とか。行事をするまでにはどういうことが行われていますよ、ということ子どもたちに分かるように説明していただく。実際に、安全面の話をしていただく。できる時にできる分野で協力していただく。

今の新垣さんのお話では、それぞれ組織は別々でもそれを網羅して1つの組織を作れば、それぞれの関わりで学校のほうに連携を取って、「どんなお手伝いができますか？」と言える。学校側から積極的に求めてもらうようにしたらいいんじゃないでしょうか。

佐 藤：中学校で目に見えた効果というのはありますか？

嶺 井：先ほども話が出ました関わり公開日というのを、昨日やったばかりなんですね。弱い先生だと思ったら暴言吐く子がいるんですが、それでも地域の方が見守ってあげれば大丈夫じゃないかという先生の話ですとか。学校に行けない子どもがいたんですけど、教室で授業させて、授

業というよりも私たちミントウンの会が関わって、三学期間ずっと相談室で学習して卒業させました。そして卒業後、給油所で勤めたという例もあります。

佐 藤：以前に聞き取りしたところで、こういうプラスの実績があると学校はお願いしやすいというお話がありました。

ある意味、荒れたクラスに入っていくというのは、学校としてもお願いするというのは難しいことだったと思うんですが、その辺はどうなっていますか？

嶺 井：確かに壁は感じますね。中学校は専門的なところですからね。入りづらいところはあります。

英語、数学、国語に関しては僅かではありましたが、私たちが入ってやりました。入ったら子どもたちも一生懸命頑張っただけで分かるようになったというのはあります。今年に入ってからもう全然ないもんですから、どうなったのかな、というのはあります。

糸 数：子どもの中にもプライドじゃないですけど、ミントウンの会の専門じゃない人に世話になりたくない、という気持ちがあるのかなと思います。この時期ってどうしても自我が芽生えてくるというのがあるもんですから、本当に納得させて指導していかなければいけない。

ミントウンの会で続いているのは、小学校での指導です。回答は渡されていますので、その考え方やちょっとした修正ならば僕らでも一言言えば「分かったー！」という表情をしますよね。1回でもこの表情があると、次も来る気になるんですよ。だから、このミントウンの会のメンバーが減らないのは、そういうようなものがあってじゃないかな、と。そして終わるタイミングに、子どもたちからお礼状がくるんです。そういうのを見てやって良かったなというのが多いと思いますね。

大宜見：地域外の方が減らない、というメリットはそこにあると思うんですけど、そういう研修会というか玉城を回る独自の勉強会とかもあるんですか？

島 袋：関連しますが、ミントウンの会の組織内の親睦や研修が目的の1つだという話がありましたが、玉城の歴史や地域のことについて学んでいたりはしますか？

この前、今帰仁村歴史文化センターへ聴き取り調査に行ったら、そのレベルがものすごかったです。今帰仁の城址の研究、部落の研究、司祭、祭事の研究がすごくて、村民の方が一生懸命研究されていて、それでグスクのボランティアガイド団体まで作ってありました。

単純な答えを持って教えられるものと、それからとても難しい地域の歴史・文化も学習して、今帰仁村歴史文化センターみたいに修得していかないと、子どもたちに説明できるレベルにまで持っていけないですよ。しかもそれは、異動する中学校の先生でさえも分からない。玉城の歴史・文化にとって重要だけど、先生でも分からない部分については、多分、要請する学校側も要請ができないということもあるかもしれない。教える側もかなり学習して自分たちで研修しないと、こういうレベルにはならないと思います。これが一番難しいですが、玉城の人を作るために、玉城の地域の子どもになるためには重要な部分だと思うんですけども、そのへん、上手くいっているのかなというのをお聞きしたいです。

石 嶺：私たちの目標の1つが会員の親睦や研修と言ったんですけども、今まで私たちの研修というのは、地域で退官された先生をお招きして講話をしてもらっていました。最近では、興南高校の我喜屋監督です。あの方も玉城出身なものですから、その方を招いて、中学のPTAも一緒になって講演をしてもらったり、それから去年は地域学習ということで史跡めぐりをしてみたい、



そういうようなことはやっております。

歴史としては、玉城には歴史ガイドの組織もあるんですよ。今のところ、そういうような玉城の歴史・文化というものに対する要請があれば、その要請にも応えるようにしています。一昨年は中学校の総合学習の中で、玉城の地域を知ろうというのがありました。その学習にも要請がありましたので、3名くらい外部講師として対応したことがあります。

島 袋：ミントウンの会が歴史ガイドの方をスカウトして連れてきたということですか？

石 嶺：いや、ミントウンの会の方だけで、対応できました。

高 嶺：実は石嶺会長自身が、玉城村時代から村史編集、市史編集に関わっていらっしゃるので、玉城地域の歴史的なことにはとても詳しいのです。

嶺 井：玉城は、グスクと水の里、というネーミングがあるんです。グスクは玉城城址、水の里は垣花ヒージャー。一昨年は県の社会科研究会でも、やっぱりミントウンの会の仲間が実際そこに行って説明しました。大変好評でしたね。

島 袋：それをみんなで共有するための学習会みたいなのは、どういうふうにやったんですか？

石 嶺：会員で地域めぐりをしました

糸 数：船越地域にゆうひ川という川があるんですが、これの浄化作戦というのを小学校が取り組んでいて、その中で、昔はどうだったのかなどを聞きたいということで頼まれたんですよ。僕も一人では心許なく、ミントウンの会というわけにもいかない。地域の問題ですから。そこで同級生4名くらいに声をかけて、「昔のゆうひ川の勉強会で呼ばれているんだけど、あんたたちできるか？」と声をかけたら、「やらんといかんだろう」と。やるからには資料や写真を集めて小学校4年生の中で、1時間くらい話しましたが、本人たちも非常に緊張して終わった時には「もうやらん」と言っていました。でも心の中では喜ばれたことが嬉しくて、また次も頼むと言ったら「必要であればやる」という話がありました。

専門的な歴史とかそういうものじゃなくても、僕らは素人だけれども、昔、50年前のことを知っていますよね。昔を知っているということで、今のものに生きてくるんじゃないかと思います。

島 袋：課題探求型の授業で、こうなるとミントウンの会の方々が資料を集めて、授業作りまで関わって、先生みみたいな役目ですね。

石 嶺：こういうことは総合学習の中ではやりますね。

糸 数：僕だけじゃないんですよ。地域の川の側に住んでいる人もいますので、そこでの昔の話とか、「ここは昔泳げたんだよ～」とか。

島 袋：そういうのは事前に、教科の担当の先生と調整しているんですか？

糸 数：そういうこともあると思うんですけど、だけど、今はこんなですから。この川を見て、昔はどうだったのかなあ、と子どもたちは推察する。「昔は、そうじゃなかったんだよ」というようなことをこの人がまた話して聞かせるという。

嶺 井：学校の先生方がその地域を分らないと、子どもたちに十分な教育ができないです、という考えで、先生方も勉強会をやりました。

高 嶺：よそから来た先生が意外と「校区にこういうのがありますよね！」と興味を持ってこられるんです。

島 袋：それでは、そういう勉強会にも、もしかしたら石嶺会長が教えたりしているんですか？

石 嶺：学校には、例えば環境の日とか地域の歴史と自然環境というような形で話をしたことがあります。先ほどの中学校での総合学習の社会科研究会の中で、私が授業を持っているわけですが、授業というよりは先生方の学習計画の流れの中で、「ここまで私が進めてきているので、ここで先生がこういうふうにも子どもたちと取り組んでももらえませんか？」というように、そういう話のやりとりをしましたね。

島 袋：授業の中で連動して先生方が作っていたわけですか？

石 嶺：これは、私たちがしょっちゅう授業形態の学習の流れの中に関わっているわけではないです。社会科の授業の中での1時間ということでした。

糸 数：あまりそういう専門的な形になると、僕らは縛られますよね。縛られると嫌だなと。自分の仕事、やるべきことを犠牲にしてまではできない、というのがあります。

大宜見：先生方の勉強会の持ち方はどちらから投げかけるんですか？

嶺 井：要請が来たらやります。玉城のいいところは、そこなんです。お願いしたら、誰も断らない。

大宜見：学校から授業の要請が来たときに、学校の先生方の事前勉強会をミントウンの会から投げかけるんですか？

嶺 井：先生方の中から出たそうです。教頭先生に要請があったそうです。

石 嶺：学校の要請を受けて、ミントウンの会は、それではこういうふうに進めていこう、というようなことがあったんじゃないかなと思います。そして、それが終わったら、「何かまた他にないですか？」と先生方の質問を受けながら深めていくという形態じゃないかなと思います。

仲 村：評議員会の中から先生方が地域を知るということで、「何か計画したら対応できますか？」という話が出たことがあるんですね。児童生徒だけの学習支援だけではなくて、子どもを指導する先生方にとって必要であればやりますよ、という話は、学校との連携の話し合いの中でやっています。必要なときはいつでも言ってください、と言って、できるような体制にはしています。

島 袋：教頭先生がキーパーソンですよ。

仲 村：教頭先生は全体を把握し、各先生方が何をやっているのか教頭先生が把握できないと困るので、それで窓口を一本化して、教頭先生からミントウンの会に要請するという形にしています。

島 袋：教頭先生が学校の中で各先生方がやっている授業の内容を把握して、そして学校と地域をどうつなげれば上手くいくかということが年次の初頭に頭の中に入っていて、それでうまくミントウンの会に要請する。そういった力がない人だったら大変なことにならないですか？

仲 村：ですから、できるだけ年度当初に学校との連絡会議を持ちます。今は5月頃連絡会を持って、学校の要請はまとめて教頭先生を通じてやっています。

島 袋：システム化しているんですね。

仲 村：ある程度はできていると思うので、それを補完するような形で、そういうような説明を会をもっています。

島 袋：教頭先生によって濃淡はないですか？

石 嶺：それは、ありますね。

佐 藤：校長先生には評議員として入ってもらっていて、年度の初めに計画を話し合っている。しかし、校長先生も教頭先生も変わることもあるだろうし、その時に、どういうふうにして働きかける

のか。何か工夫されているようなことはありますか？学校のほうで受け継いでもらえるようにしているんですか？

石 嶺：教頭先生、校長先生の関心の度合いによって、利用に差があるのか、という問題。それは確かにあるように感じます。私たちミントウンの会が校長先生方と話し合って「こういうふうに進めていきます」、「こういうような形でお願いします」と確認しても、学校の先生方に案外浸透していないのかなと思うようなふしのボランティア要請があったりします。新しく赴任してきた先生方には、ボランティアを要請したくても、どこにお願いしたらいいのか分からない先生もたまにいると思うんです。分からないと、先生方もやりにくい面もあると思います。ですから、「地域との関わりの窓口はミントウンの会だよ」というのを先生方によく浸透させてください、とお願いしています。

島 袋：今、お話を伺っていて、南城市という単位でできるのかというのと、逆に、学校単位のほうが緻密につながれて、今の単位が適正規模なのか、ということについて聞かせてもらえませんか？

石 嶺：私は中学校区単位がいいんじゃないかと思います。そして、南城市として各単位を統括する組織があればいいと思います。

島 袋：中学校くらいだと今の 140 名規模の感覚でできますか？

石 嶺：本当はもっとほしいです。

嶺 井：足りないですね。

仲 村：校区を狭めてしまうと人材確保が大変ですね。小学校でしたら 20 名、30 名、一度に支援要請がある場合があるわけですよ。

それからもう 1 つは、玉城地区内だけかという話がありましたが、例えば知念の学校から市のボランティア団体のミントウンの会に、「中学校の英語の好きな子どもたちに、放課後英語の勉強をしたいので面倒見てくれますか？」という要請が来たりします。そのような場合は、基本的には玉城の地区内ですけれども、こちらで対応できるものは対応しましょう、という形で処理しています。

ゆくゆくは、合併した 4 地区のそれぞれに組織ができて、足りない時には、それぞれが融通し合うということができればいいんじゃないのかな。そして、中学校校区単位でやったほうがいいんじゃないかと思います。例えば、玉城の人が玉城の子どもたちを、佐敷の人が佐敷の子どもたちを支援し、地域で地域の子どもたちを見たほうがいいんじゃないかなと思います。

島 袋：これは 3 小学校はすべて玉城中学校に行くんですね。小中一貫的な面倒見という感じがします。ミントウンの会のみなさんは長年やっていらっしゃると思うんですけど、子どもの育ちを小学校から中学校まで見て、そういう一貫的な流れというか、学校の色があると思います。小学校の時から見ていたら、なぜ中学校で問題を起こすような子どもになるのか分かる、ということですよ。

糸 数：玉城小学校、百名小学校、船越小学校とあるんですが、同じような時期にだったら自分の地域に行きたいなと思いますね。僕はまだ百名小学校には 1 回も行っていないです。同じ条件だったら自分の地域がいいなと思います。

石 嶺：会員の中には、まだそういう意識はあります。

新 垣：私たち中城では、発達障がいの子どもの支援をしていますが、なかなか学校は発達障がいの子もた

ちの支援というのは受け入れないです。だから、学習支援的、生活支援的なものになっています。メンバーがその授業ごとで変わったりすると、なかなか子どもが落ち着かないというのがあります。でも、1人でその子だけを見ていると大きく負担がかかるというのが課題です。どんなふうにして一人の負担を減らしていますか？

糸 数：一人の子どもをずっとということであれば、本務でないとできないと思います。毎日違う人がその子ども、その子どもを見るというのは、法的に許されないんじゃないかな。そのような場合は、基本的に教職免許を持っている会員があたります。子どもの教育を受ける権利というのは、正式な教育でないといけないわけですから。教務計画に基づいていないといけないというのもあると思いますし。

僕も、1ヵ年間は取り出し授業といいますか、1週間に1回1時間だけ、ということはやりました。これを毎日この子だけをミントウンの会だけでいうとなると多分、負担が重くなる。そういうのだったら遠慮することが多くなると思います。

新 垣：今2人が、毎日見えています。負担が重く、なかなかね。

糸 数：その辺は行政あたりにやってもらわないといけないところだと思います。もしできたら、1週間に2回、3回と頼んで、了解の下にやってもらえばできないことでもないでしょうけど。とにかく厳しいでしょうね。百名小学校も僕らが2ヵ年か3ヵ年やった最後の年には、市から専門の先生にずっと見てもらっていました。

前 城：今の話とっても重要なんです、中間的に整理したいんです、以前伺った繁多川公民館と真地小学校の事例も、そして先週聞いた御所南小学校もレベルの違いはありますが、ミントウンの会にも津覇小学校にも共通するところがあるわけですよ。キーワードは、支援を「押し付けない」というところと「学校に負担をかけない」というこの2つ。やっぱり活動が2005年から続いて、小さな成功体験や小さな失敗もあったりして、修正修正して、失敗と成功を繰り返しながら行なってきて、先生方とこんな経験積んでやったら、信頼関係ができるんだな、と。この信頼関係を構築するのに複数年かかるんだなということが分かったのと、絶対、先生に迷惑をかけないということ。先生がほしい情報を逆に持って行って、「また次もお願い」と言ってもらえるような、こういう活動を続けていくのが大事だと思いました。

それで、会則が改正されたのが去年ですね。これはミントウンの会が成長してきて、こんな活動しているんだということがまとまってきて、これがあると誰が変わろうと新しい人が来ても、これを見て基本姿勢がわかるというのが大事なことだな、と思いました。

もう1つは、人材バンクは私も見た時に限界感しました。行政の限界はここなんです。行政は情報集めるのは得意なんです。そして情報をデジタル化するのもOKなんです。でも、デジタル化しただけでは動かないんですよ。アナログのエンジンがないといけない。アナログのエンジンは行政職員ではだめなんです。行政職員は、これ担えないんですよ。異動もあるし。これを担うのは、ミントウンの会のような行政から出たダイナモ。エンジンが必要。

翔南小学校も動いているのは我々なんです。でも、PTAも限界があるんですね。ミントウンの会のような事例はすごく大事で、これの最高事例が御所南小学校じゃないかなと思っているんです。私は御所南小学校の講演会の時に最後に言いました。「どこでも学校はあって、どこでも事例はありますよ」と。新垣さんもさっき言っていた「我々やっていますよ」、これは気付き

なんですよ。あとは、段階を踏んでいけばいいのと、そこに気付きを持っている人がいるかないかなんです。これから、沖縄はこういう事例をみんなで共有すると、御所南小学校のようになっていくんじゃないかなと思いました。この調査をしてすごく整理ができたなと思います。

もう1つ、これは、私の聞いてきた中での感想なんですけど、視点を変えて聞きたかったのは、子どもたちです。高嶺さんは保育園の時点から分かりますよね。港川さんは、民生委員をされていて地域のことが見えてきますよね。「あ、この子、支援が必要だな」というのは幼少期から分かるわけです。今は民生委員も保育士も学校の先生も点でしか見てないんですが、これが今ミントウンの会では、プロの人が集まっていますよね。私も行政の中において、ケース会議に呼ばれます。みんなが持っていない情報をこんなに持っているんだというのがわかるんですが、あのようなケース会議は行政がやっているから年に2回くらいしかありません。でも、オフで集まっているみなさんはいつでも情報交換できるじゃないですか。地域とか子どもたちを良い方向に導いていく事例の情報だけ交換するだけでもすごいじゃないですか。保育園や幼稚園から見て、この子は支援が必要だなというのが小学校の時に分かっていたら、すごい組織なんじゃないかなと思います。

高 嶺：そこまではしてないんじゃないかな。今はあくまでも学校からの要請に答えているという形なので、こちらからの問題指摘というのはやっていないですし。負担をかけるようなことはしない、というのがありますので。相談があった時は、乗ることもあるんですけど。こちらからというのはないです。

石 嶺：ただ特別支援のボランティアというのは、南城市でも取り組んでいると思うんですよ。ミントウンの会でも一昨年くらい前に要請があって、特別支援に関わるために何時間か講習を受けて取り組んでもらったことはあります。港川さんには、そのへんにも関わってもらったんですけどね。その程度ですかね。やっぱり特別支援に取り組んでいる係りの担当の先生がいますので、「こういう取り組みがしたいんですけど、ミントウンの会さんどうですか？」という形で要請は来ます。

島 袋：地区外から移住してきた新しい方々が、例えばこのミントウンの会に入ることによって、子どもの縁で地域の人と上手くつながりあって、地域の人として動き出した例はありますか？本土から来た人とか那覇から来た人とか新しい方々が、学習支援ボランティアをすることによってつながって、今では完全に玉城に20年いるような顔してるみたいな例はありますか？また、特別、地域社会に参加するのが難しい子どもでも、ミントウンの会で面倒見ていく中で地域社会と関わりやすくなったということもありそうですが。

高 嶺：ミントウンの会の会員が教職経験者だけではなくて、民生委員が入っていますし、それから色々な関係の人が入っていますので、例えばウォーキング仲間に声をかけてみるとか、それから自分でやっているサークルの仲間に声をかけてみたりしています。その時に説明するんですよ。「本当に単純な学習支援だから、一度体験してみない？」と。あるいは、ミントウンの会はよく新聞に載せていただいていますので、新聞を見て、ミントウンの会の活動を見てみたいなど、わざわざいらっしゃる方もいます。そこを見に来たついでに、積極的に呼び込むんですよ。そういう形で広がりが増えていて、特に勧誘というのじゃなくて、こういう声かけで会員を増やしている状態です。

島 袋：結構、新しい方が多いんですか？

高 嶺：多いですね。学校側は名簿を準備してくださるんですね。

それに、地域で声かけを待っている方もいますので、そういう方たちに声をかけると、会員になってくれる。「あくまで、ボランティアですよ。自分ができる時間帯でいいですよ。気軽に参加してください」というふうにやっています。

石 嶺：特に移住してきた方々の中に、何かやりたいけれど、機会がないというような人も多いんですよね。例えば、ウォーキングをしているときによく顔を合わせるような人に声かけて入ってもらう。そして、活動していく中で、「楽しいです」というような返事がよく返ってきますね。

嶺 井：先ほどの特別支援の話ですが、教育相談員という方が学校を回っていて、その方が学校を回られて、ミントウンの会にも情報をくれます。

佐 藤：自分は沖縄に来たのが 10 年前で、多分沖縄自治研究会が私にとってはミントウンの会みたいなもので、これがなかったら大学で教える以外地域社会に溶け込めないというのはよく分かります。やはり声をかけてもらうのを待っていたんですね。

今までのところで前城さんがまとめてくださったんですが、何か他に質問はありますか？

大宜見：PTA の OB も関わるようになっていくという話があったんですが、現役の PTA の関わりはありますか？

石 嶺：OB ですが、そういう方も何名かいます。でも、現在 PTA 会長をしている人たちに意識的に入ってもらうというところまではいっていません。しかし、これは必要なのかなと思っています。

佐 藤：前城さんから話があったように、必要な情報を横でつなぐ形で行うということと、あくまでも要請があった時に積極的に応えるということ。学校にとって、本当に難しい子どもさんの支援に関しても力を貸していただけるという認識があれば、要請がしやすくなるのかな。安全網から落ちてしまうみたいなことをよく聞くので。

非常にご苦労があるんだろうなと思うんですけども、今後学校とのつながりをどうしていきたい、というのはありますか？

石 嶺：とにかく、私たちは学校を支援していく。学校が、こうしたいな、支援ボランティアいないかなという時は、すべてミントウンの会に声をかけてください、と。私たちは、積極的に対応することを絶えず発信しています。

また、私たちは、学校の要請に従って支援する、という範囲に留まっているけれども、これよりももっと効果的な学習支援のあり方が考えられないかなというのを学校側にも問いかけていくし、我々自体も話し合う必要があると思ったりしていますね。

嶺 井：一番、助かっているのは、事務局を固定したことです。前はもうあっち行きこっち行きで対応していたけど、月水金の何時から何時までと固定したら気軽に先生方もお電話をくれます。

石 嶺：事務局は玉城小学校の事務室の中に席を置いています。

前 城：玉城小学校に置いたのはいつからですか？

高 嶺：学校支援本部事業を 3 カ年間受けたときに玉城中学校に置こうということだったんですけども、中学校ではなく玉城小学校に置いたんですね。その後学校支援本部事業は引き上げたんですが、継続して置いてほしいと要請して、玉城小学校さんに承諾していただきました。電話

などもタダで使わせてもらっています。これはいつも助かります。

最初、資金面では2万円でスタートしたんですよ。それで石嶺会長らが支援をお願いしたり、対米請求権協会の助成金を勝ち取ったのも石嶺会長の力なんですね。先ほども話にありましたが、新聞でこういう情報を掴んで、それで県に出向いて、南城市を通して予算を獲得しました。

コーディネーターの時は賃金があったんですが、今はそれももう全くないので、純粋なボランティアですね。学校支援本部事業のときのパソコンも1台あります。

石 嶺：玉城小学校の消耗品を使っているわけですが、教育委員会もそれを考慮していると思います。

高 嶺：玉城小学校の消耗品や電話を使っていますけれども、ミントウンの会の予算から差し上げたりしているんです。切手代としてもらえませんかという時は、予算の範囲内ですが、できるだけ出すようにしています。

前 城：ミントウンの会の会費はありますか？

高 嶺：会費はとっていません。普段からボランティアで来てもらっているんで、会費は一切もらっていません。

石 嶺：最初の頃は、例えば総会費 1500 円であれば、1000 円を総会費に充てて、後の 500 円は積み立て予算に回すなど、そういうやりくりはしていました。

前 城：事務局が玉城小学校にあると、依頼も多いですか？

嶺 井：学習支援の配置表を見ていただいたら分かるんですが、日によっては 50 名のときもあります。特に、これは、玉城小学校で達成度テストがあるときに集中しています。

前 城：さっき僕が行政の限界と言いましたが、これは組織の話なんです。こうやって学校に入っていくような体制というのは、人材バンクのデータがあってできたのではなくて、間違いなくアナログなんです。つながり、信頼関係なんです。

翔南小学校では事務局がありません。今ボランティアの支援員がいるんですけど、この方が3ヵ年終わった時に、翔南小学校に入ってくれるといいなと思っているんですけど、そういう組織が学校内にないと、まず回らないんですね。

佐 藤：私たちは県内いくつかの試みを伺ってきましたが、これから何か始めようというところがたくさんあると思うんです。

私も学校の先生の端くれなので分かりますが、学校の先生というのは、教室の中では自分が王様のつもりになっちゃって、なかなか人に助けを求めることをしにくい。だけれども、これを活かして、先生方の重荷にならない押し付けにならない、かつ役立つ、助け合えるような実践が、県内にあることが知られていくようになってほしい。岡山と京都から実践されている先生をお招きして講演をやったように、来年の2月にはシンポジウムをやろうと思っています。こう勉強することによって気付かれたり、目が開かれるようになればいいなと思います。

それから、先ほど、玉城の方たちは頼まれたら断らないとおっしゃっていたんですが、地域の強さというものがあるんじゃないかと思っています。大里と佐敷では、新しく作ろうという試みがあって、それがテストケースになるのかなと思いますが、どうでしょうか？玉城と他の地域では、南城市内でも地域のあり方とか相当違うというような感触をお持ちですか？

石 嶺：そのへんはよく分からないんですが、今、佐敷と大里の方がコーディネーターとして、かなり積極的に介入しています。近頃の情報では、佐敷と大里の両方で 100 名くらい確保されている

と聞いています。かなり充実した組織ができていくのかなと思っております。

ただ、知念にも私たちと同じような学習支援ボランティアの活動があったわけなんです、今停滞気味なんですね。私たち玉城村にも教員の組織として「玉水会」がありましたが、当初、学校支援ボランティアはその会の会員でした。知念は「水明会」という教員 OB 組織があるんですが、その OB が学習支援ボランティアに関わっています。それ以外の人たちは会員に入っていないということで、人材の確保が上手くできず、あまり発展していない。水明会のメンバーだけでなく、一般のみなさんも会員に取り込むことができればいいんじゃないかなと思います。この学校支援本部事業の運営委員中に、知念の学校支援ボランティア水明会の会長も入っていますので、情報交換する中で知念もそれなりに改正していくんじゃないかなと思います。

嶺 井：知念の話が出ましたが、そのすいめい会の取りまとめが小学校の校長先生で、事務局が中学校の若い先生だったんです。一人ひとり会員にはがきを出すそうなんですね。そうすると参加できない、バツという答えが多いそうです。やはり声を聞いて、直接の信頼関係を築かないといけないと思います。

糸 数：今知念や大里の話が出ましたが、やっぱり意識して立ち上げたいなと思って働きかけるんだけど、肝心の退職教員が全然協力してくれないということで悩んでいたようです。動き自体はあると思うんですけど、同調者が少ないんですね。こういうものが難しいのは、雰囲気作りだと思います。信頼関係がないといけないと思います。

僕らは段階の世代で、「今度、老人会長になってよ」と言われても引き受けませんよ。なぜかと言うと、僕の後に 22 年生まれの方々がいて、隙間が空いているんですよ。「次の会長が決まるまでは僕はやらないよ」と断りましたが、つまり、一度引き受けてしまうと、途中で投げられないという心配があって、こういうのを引き受けたくなくなる、というのがあってと思います。やってみたらなんでもないんですけどね。

仲 村：実際、私は教職とは関係ありませんでしたので、最初、学習支援ボランティアとあったときに引いたわけです。自分の子どもさえ満足に教えることができなかったのが、今から子どもたちの学習の面倒みることができるかな、という心配があったわけです。話があって、まずは現場を見てみて、やってみようかと。しかも、会長の石嶺先生は私の恩師です。恩師の言葉というのは 70 近くになっても重いんですよ。(笑)

いざやってみると、子どもたちが非常に人懐っこい。最初、対面して教えるときに、隣の子どもたちにちょっかいを出して落ち着かない。この子たちをどう面倒見ればいいのかと思っていた私が考えたのが、子どもたちの名前を必ずメモを取っておくということ。子どもたちが「先生何しているの?」と聞くと、「あなたたちの名前を覚えようと思っているんだよ。名前を聞かせて!」と。次呼ぶときは名前を呼ぶわけです。少人数ですし、「ここに座って、一緒にやってみようよ」と言ったら、だんだん落ち着くようになりました。そういうふうに 2、3 回続けるうちに、本人から「先生教えて下さい!」と言ってくるんです。こういう、子どもたちとの信頼関係。また、名前で呼ぶことによって、名前で呼んでくれる。3 年生だった子が 4 年生になって、4 年生だった子が 5 年生になって、こういう段階を踏んで、道で会ったら挨拶してくれる、地域であつたら挨拶してくれる。こういう形で、ボランティア会員のみなさんと地域



の子どもたちがつながりができることは大事なことはないかと思うんです。ボランティアや  
ってよかったなと思いますし、続けたほうがいいなと思っています。

嶺 井：私たち会員は、ボケ防止だと言ってくれますよ。(笑)

佐 藤：教室の中で勉強を教えるということだけに留まらない話ですね。

前 城：嶺井さんのコーディネーターの期間は何年から何年までなんですか？

嶺 井：平成 20 年から 22 年までの 3 年間です。

嘉 数：合併で自分たちが住んでいた場所が地図から消えて南城市という一くくりになってしまった。  
たぶん地域住民にとってはぽっかり心に穴が空いてしまった、そういう雰囲気もあったと思う  
んですよ。でもその地域の方々が学校に関わることで、玉城の魂というか、それを直接子ども  
たちに教えられる。それは住民の側にとって、なくなった地名の代わりに地域のことを子ども  
たちに色々教えられるというのは、ものすごい充実感があるんじゃないかなと思うんです。ま  
たこれを繰り返すことで、地名はなくなったけど地域の歴史というか、コミュニティの強さとい  
うのはずっと続くはずだから、それはなくなる以上にとっても有意義だなと思いました。もし、  
それに対する住民たちの反応があれば聞かせてもらいたいです。

糸 数：子どもたちの旧玉城村に対する意識自体は分かりませんが、子どもたちには校区に対するアイ  
デンティティがあります。僕も地域でよく子どもたちと話をしますが、旧玉城村だとか知念村  
だとか、子どもは意識していないんじゃないかなと思います。

でも老人会では、今でも玉城地域の代表なんですよ。老人会だけでなく、体協やチーム競技  
のものに関しては部落代表なんです。

嘉 数：私は今、久茂地小学校の統廃合問題に関わっているんですが、学校がなくなるであろう地域の  
人々がもし子どもたちに教える機会があれば、何かしらの形で残るんじゃないかな、という希  
望を含めて質問をしました。ありがとうございました。

新 垣：今の質問に関連してなんですが、私はうるま市にいました。うるま市の合併は、まだ地域が分  
裂している状態です。地域が「屋小作え」（排他的な集団意識）しています。しかし、南城市  
に行くと、ほとんどまとまりつつありますね。もうまとまっていると言っても過言ではない。  
やはりこれは、市長の力と地域力なのかなと思います。

高 嶺：うまい具合に南城市を上空からみた形がハート型になっているからじゃないですか？(笑)

新 垣：旧行政がうまい具合にまとまっているから地域の問題が解決していると思って、今関心を持っ  
て見えています。うるま市はばらばらなんですよ、悲しいことに。

嶺 井：うるま市にはありますか？南城市では毎日市歌が流れてきます。

糸 数：例えば健康推進委員など、地域の色々な組織が、地域個々のものではなくて、「南城市の健康推  
進委員」というように活用しているので、地域のもの全部市につながっているような感じが  
しますね。公共放送でも各部落に入るようなものでも南城市の放送で流しています。こうい  
ったことも意識を上げる上では大事かもしれないですね。

大宜見：南城市全域で同じ放送が流れるということですか？

石 嶺：そうです。ダイレクトに市から放送が流れます。

糸 数：字の放送より多いくらいです。

大宜見：区長が流すのではないんですか？

高 嶺：いいえ。テープで流されていて、各公民館につながっているんです。

新 垣：いやあ、南城市の合併は相当うまくいっていますね。とってもうらやましいです！

石 嶺：ただ、南城市の場合は、南城市玉城字〇〇、南城市知念字〇〇と言うように、旧の地名を残してあります。私は残してあるのは非常に良いことではないかな、と思います。これがあるからばらばらになるということではなくて、それぞれの地域の良さを活かして、その良さをみんなで競い合う、まとめるという方向に向かっているのではないかなと思います。その方向に向かっているという一つの要因と言いますか、色んな協議会、サークル、「市民会議」があります。その会議の中に入っているメンバーは、玉城の人も佐敷の人も大里の人も知念の人もいます。ですから、<sup>ゑん</sup>屋小作<sup>せう</sup>えにはならないという気がします。

仲 村：他所のこと言っはなんですが、うるま市でいえば、かつちん半島（勝連半島）、具志ちゃー（具志川）、石ちゃー（石川）という地域意識が強いところですよ。南城市でしたら、歴史的には「<sup>あがり</sup>東<sup>きり</sup>四間切」の一体感があつたんじゃないかな。

糸 数：玉城、知念、佐敷、大里は村民性が似ているような感じがします。そういうようなこともあって、あまり競合するようなことがない。

石 嶺：合併する過程の中で、最初は与那原が入っていて、大里が抜けていました。ところが、話し合いをする中で、大里が入りました。それで歴史的な東四間切が合併することになったのです。南城市の形はハート型なので、南城市のシンボルマークもハートです。8月10日・ハートの日を南城市の日にしようじゃないか、という話にもなっています。

佐 藤：合併したときに心配が募るのは、地域のつながりがなくなってしまうんじゃないかということだと思うんですが、こちらの場合では玉城というつながりがちゃんとあって、平行した形で合併を受け入れているという印象を受けたんですね。過去合併したところで成功しているところはそうないと思うんですけど、そういうつながりがあるから、学校を中心としたまとまりがあるから、相乗作用があるんだろうなという発見がありました。

今日は本当にありがとうございました。